

# 発見! おごおり遺産

No.28 稲荷信仰

毎年2月に行われる稲荷神社の縁日「初午祭」。市内でも多く見られる稲荷信仰には、どのような歴史や目的があるのでしょうか。



黒岩稲荷神社(西島)の鳥居と初午祭のようす



倉稲魂神社(松崎)

## 稲

荷神社は全国で約3万社あるとされ、各地にある祠などを加えると、その数は無数とも言えます。

稲荷神社の祭神は、倉稲魂神です。

倉稲魂神は五穀を司る神で、稲作・農業の神とされる他、漁業神、商業神、福神として平安時代以降、人々から厚い信仰を受けてきました。神使は狐で、神社境内などに多くの石像が見られます。稲荷神社といえば朱色の鳥居が思い浮かびますが、朱色は稲作に必要な陽光や生命を表す温かい色で、災厄を払う力があるとされています。

筑後地方にも多くの稲荷神社がありますが、中でも特に信仰の厚い十社を「筑後十社稲荷」と呼びます。筆頭は、高良大社の末社である大学稲荷神社で、明和8年(1771)に京都の伏見稲荷大社から勧請されました。他に風浪宮の松風稲荷神社や岩藤稲荷神社などがあります。小郡市内では松崎の倉稲魂神社と西島の黒岩稲荷神社がこれに該当します。

倉稲魂神社は、寛文8年(1668)に有馬豊範が松崎藩1万石を分封された際、城の鎮護として京都の伏見稲荷

大社から勧請して城北に祀ったことが始まりです。後に天満神社と合祀され、天満稲荷神社と呼ばれます。

黒岩稲荷神社には、伝承があります。壇ノ浦の戦いに敗れて逃れた平家一門の慈禅尼が、伏見稲荷大社から受けた分霊を黒岩山の岩穴に隠れて祀り、朝夕礼拝を続けました。その後慈禅尼は肥後に去りましたが、付添いの源三郎介が意志を継いで祭祀を続けたのが、この神社の始まりというものです。以来今日まで郷土の人々の崇敬も厚く、寛延2年(1749)に久留米藩主有馬頼麿により社殿や参道が、明和2年(1765)に後の藩主有馬頼貴により鳥居が献上されました。

黒岩稲荷神社では、2月最初の午の日に初午祭が行われます(今年は10日)。この日は稲荷神社の縁日で、元々農家は農業を休んで赤飯を炊いたり、餅をついたりして一日を楽しみました。現在も県内外から多くの人々が参詣に訪れ、五穀豊穡・家内安全を祈ります。ひよっとこ・おかめの面をかぶって踊るのも、この初午祭の特徴です。

問合せ先 文化財課 ☎ 75・7555

おごおり遺産とは?》》近年の市内調査で「再発見」した文化遺産=市民のたからのこと